

# 対話における言語の機能と発達

## —地域日本語教室で日本人と外国人がともにことばを学ぶこと—

野々口 ちとせ

学位取得年月：平成 24 年 9 月

取得学位名：博士(人文科学)

学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】 地域日本語教育、 対話、 認識の変容、 生態学的意味の生成、 相互学習  
【要旨】

本研究は、多言語多文化共生への対話による学習を、地域日本語教育でどのように実現できるかを追求した研究である。主体的な意志をもつ人間間の共生には、意識変革が必要だと考えられている。つまり、他者との共生への学習は意識変容の学習と捉えられる。対話による意識変容の学習では、対話を通して対象に対する言語主体の認識が変わるとき、新たな認識の下で、対象を指し示す言葉の意味の生態系も組み替えられる。本研究では、人の生と結びついた、生態学的な意味の生成を〈言語発達〉と定義した。

認識を媒介する言語の機能と上記の〈言語発達〉を観点として、筆者が日本語教師として関わった地域日本語教室の学習活動を分析した。具体的には、外国人学習者の希望に沿った学習と対話的問題提起学習において、それぞれの教室談話がどのように構造化され、参加者が言語を用いて何をどのように実践しているかを分析し、言語学習の質がどのように異なるかを検証した。

以下に分析結果の概要を示す。外国人学習者の希望に沿った学習活動は、取り上げられた話題によって、教科書型・おしゃべり型・相互探求型の 3 種類に分類することができた。①教科書型には〔質問-解説-理解〕、〔発問-応答-評価〕という談話型が見られた。教科書型では、日本語非母語話者(以下 JNNS)が教科書に書かれている言語知識を正確にかつ効率的に理解することが、言語学習とみなされていた。②おしゃべり型では、明確な目的がなく、理解の深化、知識の創造、認識の変容などは見られなかった。この活動では、〔質問-回答〕の構造によって、雑談のような「おしゃべり」を成立させること自体が課題となっており、真正性のある言語使用や円滑な言語運用が言語学習とみなされていた。③相互探求型談話では、JNNS の生活上の問題を日本語母語話者(以下 JNS)と共有し解決策を探っていた。JNNS による問題状況の提示のあと、JNS がその状況を確認することによって JNNS の問題を理解し、解決策としての日本語例を JNNS に示す。相互探究型には、このような〔状況提示-状況確認-日本語例〕という談話型が見られ、JNNS の生活改善のための日本語使用が目指されていた。以上の結果から、教科書型・おしゃべり型・相互探求型のいずれにおいても、参加者の意識変容は見られなかったが、相互探求型では言語が JNNS の生活に対する理解や思考の媒介として機能していたことがわかった。

そこで、日本語教師たちはコースデザインの改善として、日本語教師自身が活動をデザインし、言語の媒介で、参加者全員が各々の生活を省察し共生へ向かって意識を変える学習として、対話的問題提起学習を導入した。次に、対話的問題提起学習における教室談話の分析結果を示す。

1) 問題提起者自身と他の参加者たちは、提起された問題に対する認識がそれぞれ異なっていた。そのような彼らの認識が、対話を通して、上司や会社も解決に関わるべき「生産性の低下」や「不当な評価」という問題の把握へ変化し、他者の問題に自分の問題との共通点を見出していった。この対話は、相手と自分の認識が変化し、各々が自分の問題として捉え直していく生産的なプロセスと言える。

2) 話し合いを通して、自分の問題に対する認識が他者の認識を介して深まっていき、それと同時に、「残業」の意味が自分の問題を指し示すものとして拡充した。本事例では「残業」とは単に規定の時間よりも長く働くことではなく、立場の弱い者が言葉の壁によって生じる非効率を請け負わざるを得ない状況を指す。この言葉の意味(=問題に対する新たな認識)は、対話を通して他者の声を得ながら作り上げられており、JNS と JNNS の協働的な学びと言える。以上の結果から、意識変容の学習としての対話による言語学習で、言語の意味がどのように生成していくかを示した。

(ののぐち ちとせ)